
恋姫外伝～修羅と恋姫たち

南斗星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫外伝〜修羅と恋姫たち

【Nコード】

N5382Y

【作者名】

南斗星

【あらすじ】

陸奥の名を持つ男が恋姫の世界にやって来た。

この作品は『恋姫無双』と修羅の門外伝『修羅の刻』のクロスオーバー作品です。もし恋姫の世界に『陸奥圓明流』を使うものがいたならば…。という発想から生まれた作品です。チートとか転生物とかではありません。（圓明流自体チートのようなものですが）

一の刻 物語の始まりの出会い（前書き）

だいぶ遅くなっちゃったけど、もう1年以上たっちゃったけどw
修羅の門再開を祝して、書きました。

更新は遅くなるかも知れませんが、気長にやっていこうかと思いま
す。

では、本編どうぞ～

一の刻 物語の始まりの出会い

伝説である

いつの時代も決して表に出ることなく

常に時代の影にいた

最強を誇る無手の武術があつた

その名を『陸奥圓明流』という……。

河東郡、とある村外

関羽こと愛紗は戸惑っていた。

自分が住む村の近くに盗賊らしき者達が見受けられるようになったとの話を聞いて、村で自警団を組織し見回りをしていたのだが、村の外れで怪しき男を発見したとの仲間の知らせにより駆けつけてみれば、確かに怪しき風体の男がいたのである。いたのであるが、その男は何をするでもなく唯一人近くの木に寄りかかるように寝てただ。

確かに不審な者ではあるが、愛紗はこの男は盗賊の仲間ではないだろうと当たりを付けていた。『盗賊の仲間ならば村を調べるような真似もせず、このようなところで寝転がっている道理がない』そう思ったものの怪しいのに変わりはないので、とりあえず起こして事情を聞こうと思った愛紗は持っていた武器《青龍偃月刀》の柄の部分で男の腹を軽く突いた。

「おい、おい、起きろ…ええい起きんか貴様」

短気なのか、一、二度小突いただけで起きそうにもないと判断した愛紗は、今度は強めに柄で叩いた。

愛紗は村で一番の強力である。村の男達が纏めてかかって行っても、太刀打ち出来ないほどである。その愛紗が『強めに』叩いたのである。普通なら骨の一、二本折れても可笑しくはないのであるが、その男は気だるそうに振り向いただけであった。

「やっと起きたか、貴様このような所で何をやっている」

いきなり柄でぶっ飛ばしておいて、その言いようはないんじゃないかと周りの男たちは思ったが、決して口には出せないのである。

対して件の男の反応は

「寝てた」

そう言うともた愛紗に背を向け寝だした。

「ふ、ふざけるなよ貴様!!」

からかわれたとでも思ったか、愛紗はそう怒鳴ると偃月刀を男の近くに叩き付けた。

偃月刀に叩かれた地面はものすごい音と共に陥没したが、男はさほど気にせず愛紗に向き直り

「問われたから答えたのに何をそんなに怒っているんだ？」

と不思議な者を見るような目で聞いてきた。

「このような場所でただ眠こけてた訳があるまい。何の目的でここにいる、貴様まさか盗賊の一味か!？」

愛紗はさきほど自分で『盗賊ではない』と思ったことなどすっかり忘れ、そう問いただした。男の飄々とした態度に頭に血が昇り、冷静に判断などすでに出来なくなっていたのである。

そんな愛紗に対し

「腹が減ったが食うものがない、動くとき余計腹が減るので仕方なく寝てた」

とまたしても飄々と男は答えた。

その男の態度に余計頭にきた愛紗がさらに男に詰め寄ろうとした所

ぐううううう

男の腹が盛大に鳴った

「……………」

一瞬辺りを静寂が襲った

愛紗は男を疑ってたことが馬鹿馬鹿しくなり、はあ〜と溜息を付いた後武器を下ろした。

「もういい：疑って悪かったな。叩いてしまった詫びもある、村に
来い食事くらい馳走してやる」

そう言って男を村に案内すると言ったあと、ふと思い出したように話しかけた。

「そういえば名を聞いてなかったな。私の名は関羽 字は雲長と言
う、貴様の名は？」

男は立ち上がり愛紗の後に続き歩き出しながら、名乗った

「陸奥」と

一の刻 物語の始まりの出会い（後書き）

1話1話は短めになるかも知れません

二の刻 陸奥 疾風

その男の名は『陸奥^{むつ} 疾風^{はやて}』と言った。

河東郡、とある村

「ハグハグハグ、ムグムグムグ ゴックン」

……愛紗は呆氣に取られていた。

腹が減って動けぬという若者を村に案内し、食事を振舞ったがこれがものすごい食いつぶりなのである。

最初は『余程腹が減っていたのであろう』と思って見ていたが、次第にそれは驚きに呆れにそして呆氣に変わって行ったのである。

陸奥と名乗った青年、歳の頃は17、8であろうか。決して大きな体ではなくむしろ小柄で愛紗より頭1つ分は小さい。

なのに大人が10人がかりで食べる量を、1人で食いしかもその勢いはいまだ止まらぬのである。

「ふう、食った食った、おばちゃんご馳走様」

そうこうしてる内にやっと満足したのか、青年は箸を置いた。

「やっと満足したか。ったく、この村もそんなに豊かではないというに…」

自分で言い出しといて何だが、施すんじゃないかと愛紗は今更ながら後悔していた。

「まあいい、おい陸奥とか言ったな。少し貴様に聞きたいことがあるのだがかまわんか？」

陸奥がかまわないと言ったので、愛紗は疑問をぶつけた。

「貴様、陸奥とか名乗ったが、それは姓が陸 名が奥か？ならば字はないのか？」

「うん？違う違う、姓は陸奥 名は疾風 と言う。ちなみに字はない」

それを聞いた愛紗は、ふむと頷いた後

「字がないとはまた珍しいな、貴様どこの出身だ？」

「この大陸の遙か東にある小さな島国だ。」

「東の方と言うと蓬萊の国か？」

「たぶんそれであってる」

「たぶん？」

愛紗は少し疑問に感じたが、陸奥がそれ以上は話す気がなさそうなので話題を変えた。

「それで貴様はどうしてあそこで行き倒れていた？行く宛でもあったのか？」

すると陸奥は首を傾けながら

「海辺で漁師が使う船で寝ていたら、何時の間にか海に出ていた。そこであんたらの国に流れ着いた。とりあえず腹が減ったので食いもんを探したけど見つからなかったのであそこで寝てた」

まるで他人事のように答える陸奥を見て、愛紗は頭を抱えた。突拍子もない話だし、到底信じられることでもない。だが陸奥を見ていると嘘を言ってるとも思えない。結局愛紗はこのことは流すことにした。

「わかった、だがこれから先どうする？行く当てもないのだろう」

愛紗がそう問うと陸奥は笑って頷く

まったく笑い事ではないだろうに：

「なら村に置いてやるように皆に話を付けてやってもいい。」

ただしと喜ぶ陸奥を軽く睨みながら、愛紗は続ける。

「ただし自分の食い扶持の分は働いてもらうぞ。毎回あんな量をただ食いされてちゃ村人が飢え死にする」

陸奥がそれを了承したのを見て、愛紗は続ける

「今日は村長に頼んで寝床を用意してやる。明日になったら村はズレにある空き家を皆に手伝って貰って直すからそこに住めばいい。仕事に関してはその後考えよう」

そう言って食堂から出て行こうとしたがほと思い出たように聞いてみた。

「そういえば、お前武の腕前はどうか？かなり出来るのか？」

それに対して陸奥は首を振りながら

「たいしたことはない」

と答えた。

愛紗もさほど期待してなかったようで

「そうか、わかった」

とだけ言った。

最近村の付近に賊が頻繁に出没するようになったので、万が一使い手ならと思って聞いてみたのである。

「まあいい今日はもう休め。明日はお前にも家の修理をやってもらうぞ」

そ
う
い
い
な
が
ら
部
屋
を
出
て
行
っ
た
。

三の刻 戦いの前兆

陸奥が村に住み着くようになってから、早一月が立とうとしていた。最初は陸奥を敬遠してた村人だが、かの者は人と交わるのが異様にうまかったのである。

3日も立たぬうちに子供達と親しげに遊ぶようになり、10日も立てばかなりの人と交流を持った。そして一月たった今では殆どの者がまるで昔からの知り合いのように接していた。

殆どの者と言ったのは例外が1名いるからである。誰であろう他でもない愛紗である。

愛紗は自分でも自覚するほど頑なな所があった。その為陸奥とはどうしても一線引いて接してしまうのである。

そんな愛紗とは逆に陸奥が村に住むようになった翌日には、もう陸奥に懐いた者がいた。名を張飛と言い愛紗とは幼馴染である。愛紗より年下な為、愛紗は張飛を妹のように可愛がっていた。また張飛も愛紗を姉のように慕いまるで本当の姉妹のようだった。

そんな張飛が陸奥を「お兄ちゃん」と慕うようになり陸奥に真名である「鈴々」を預けてしまったことに、一抹の不安を覚えた愛紗がなぜ陸奥を慕うのか聞いた所「面白いからなのだ」と笑顔で答えられ固まったのはつい最近であったような…。

ちなみに真名については陸奥が住み着くようになった日に、愛紗がそれとなく説明していた。外からやって来た陸奥はもしかしたら真

名についても知らぬのでは？と思ったからである。

頑ななところがあるが、基本的に世話焼きな愛紗であった。

こうして平和に村での生活を営んでいた愛紗たちであったが、その平和も長くは続かない物である。

昨今大陸のあちこちに黄布を名乗る賊が出没し、村々などを襲いその勢力を拡大していったのである。

愛紗たちの村の近辺でも賊の類が増えていったが、愛紗や鈴々などを中心とした若者たちによる自警団の活躍により、村を無事守っていた。

陸奥も自警団に参加するよう誘われたが

「争いは苦手だから」

と断られていた。

実際、愛紗は陸奥に争いごとは向かないだろうと思っていた。

村の子供と遊ぶときでも、自分より何歳も年下の子供にチャンバラで負け、にこにこしてるような男なのである。

そんな争いごとに向かない男を無理やり戦わせるより、村で子供達と一緒にいてくれたほうがましと考えたのである。

それにいかに賊が出ようとも、自分と鈴々がいれば大抵なんとかな

る自信もあった。

実際いくつかの賊が攻めてきたときも、2人でほとんど片付けてしまったのであった。

だが、その2人の強さが賊に思いもよらない行動を取らせる。

自分達だけでは敵わぬと知った賊達は、周りの賊と手を組み一大勢力を作り上げ一気に村に攻め入ろうと考えたのである。その数実に2千。

今村のそして愛紗達の運命は風雲急を告げていた。

四の刻 恐怖

「姉者ゝ間違いないのだゝ賊の大群はこの村を目指してるのだー！
」

妹分の鈴々が駆け込んでくるのを見て、愛紗は歯噛みした。

（2千もの賊徒だと…なぜだ？なんでこんな小さな村にそんな大勢の賊が集まってくるのだ！）

自分達が近隣の賊にとっての脅威になるとは思いもよらない愛紗は、徒党を組んで攻めてくる賊の思惑がわからず困惑していた。

「とにかく村を守るには戦うしかない」

そうは言ってみたものの、それが難しいことは愛紗自身が一番わかっていて。賊2千に対してこちらは戦える若者はせいぜい40人だ。あとは老人か女子供しかない。

一瞬逃げることも考えたが、もはやそれも不可能に近かった。

賊はもう近隣まで来ており、老人や子供をつれて逃げ切るのは難しかった。それにもし逃げ切れたとしても、この村を捨てては明日から生きるすべはなかった。

「老人や女子供は村の奥に隠れてろ、戦える人間は防戦の準備だ。」

今は泣き言を言っても始まらない、とにかくやれることはすべてやるしかあるまいと指示をだす愛紗。自警団を集めながら、ふと陸奥

が見えないことに気がついた。

「おい鈴々、陸奥のやつどうした？今こういう状況だ、あやつにも戦ってもらわなければ」

物の役に立つかわからないが、あやつでもないよりはましと思い聞いてみたが

「知らないのだゝ気がついたら姿が見えないのだ」

と鈴々は首を振った。

あやつめ、まさか逃げおったか！と一瞬憤りかけた愛紗だったが、考えてみれば元々あやつは村の者ではない。あまりに自然に村に溶け込んでいたが、あやつが村に来てまだ一月足らずなのだ。我らと違いこの村で育ったわけでないあやつが、この村と命運を共にすることはない。元々あれほど戦いが似合わないやつもないだろう。ならばせめてあやつだけでも無事に逃げてほしいと愛紗は思い直した。

村の入り口に簡易な防衛網をひき終えた頃合を見計らうように、賊らしき影が地鳴りと共に見えてきた。

まだ距離はあるものの、その殺気めいた姿に自警団の若者たちは明らかに脅えていた。

無理もあるまい、25倍もの賊が攻めてくるのだ、どうがんばった

って勝てる見込みなどない。

かと言って逃げ道ももはやない、あと数刻後には確実な死がまっているのだ、脅えるなど言う方が無茶だ。

かくゆう愛紗も自身の体が震えるのを感じていた。

自分だけなら絶望的な戦いだろうと戦い抜き死すら受け入れる覚悟がある。

だが、自分が負ければ親しき人々が死ぬのだ。

今の状況では正直守りきれぬ自信などない。

それが愛紗を恐怖せしめていた。

愛紗の葛藤など知る由もなく、賊達はどんどん近づいてきた。

見れば自警団の者達は恐怖のあまり、ガタガタと震え涙を流していた。

これでは数以前の問題で戦いにすらならない。

そう思った愛紗は覚悟を決める

「おい鈴々ここは頼んだぞ、私は撃って出る。お前は皆とここを死守するのだ」

2千人を1人で迎え撃とうと言うのだ、不可能に決まっている。

そう言って自身を止めようとする鈴々を振りきり、愛紗は飛び出そうとしたが賊の前に1人の男が立ちふさがったのを見て、目を疑い止まってしまった。

「あれは陸奥？あやつ何を…」

まさか1人で賊と戦おうとでも言うのか？馬鹿な出来るはずがない。あやつは村の子供にすら勝てぬ弱者なのだぞ？自警団の仕事すら嫌がる弱虫なのだぞ？そんなあやつが賊に立ち向かえる筈がない。

愛紗は陸奥が自暴自棄にでもなったか、一人で命乞いでもしに行っただかと思ひ助けに飛び出そうとしたが、その瞬間、賊ではなく陸奥から沸き起こる殺気のような物に押されまたもや二の足を踏んでいた。

（な、なんだこの気配は…死神とでも言えいいのか？このような殺気は感じたことない。これを陸奥が放っているというのか…あやつといったい何者なんだ…）

愛紗は自身が言葉すら発せないことに恐怖しながら、陸奥から目が離せないでいた。

そして次の瞬間、村人たちはそこに修羅を観た。

五の刻 修羅

2千人の賊対たった1人の男

一方的な惨殺が始まった。

だが殺されていくのは男ではない、たった一人の男に2千もの賊がなすすべもなくやられていくのだ。

愛紗は自身の目を疑わずにはいられなかった。

賊達はもはやろくな反撃も出来ず、逃げ惑うだけであった。

陸奥は武器すら持たず、素手のままだった。腰に佩いた村に流れ着いた時から持っていた鉞くらいの大きさの剣すら抜いていなかった。

だというのに陸奥が腕を振るい蹴りを出すたびに、賊が狩られていくのである。

武術と言うにはあまりに凄惨な殺人術、人を殺すだけに極められた技……

もはや賊に対する恐怖など吹き飛んでいたが、代わりに愛紗は陸奥が怖かった

陸奥からの殺気は直接こちらに向けられていたわけではない。だといふのに愛紗は死に抗えぬほど陸奥が怖いのである。まるで刃物を直接心臓に向けられてるような恐怖、瞬き一つで心臓を抉られるような感覚。

直接陸奥から殺気向けられていない愛紗たちですらこうなのである。賊達の恐怖はいかほどか判ろうという物。

（アレは何なのだ？陸奥？違うアレが陸奥なわけない。陸奥は普段から飄々として弱虫で子供に好かれていて優しくて：あんな、あんな化物けものなわけない：ならアレはいったいなんだと言うのだろうか：）

愛紗は目の前で行なわれている光景に混乱しながらも、陸奥から目の離せぬ自身の感情に困惑していた。

あれほどこいた賊ももはや賊の頭のみを残して、皆殺しにされていた。

賊の頭は陸奥に恐怖しながらも、もはや逃げられぬと悟ったか半ば自棄になって陸奥に相対し自身の武器である薙刀のようなものを叩きつける。

しかし陸奥は体を僅かにずらすだけでそれをかわすと、賊の腕の関節を極めて一本背負いのような格好で投げさらに賊の頭部に蹴りを放った。

「陸奥圓明流・雷」

陸奥が呟いたその技の名は愛紗に届いたのだろうか？

賊が全て片付いたと言うのに、誰も喜びの声を上げることはなかった。

皆が昨日まで慕っていた、この男が賊以上に怖かったのである。

賊の返り血を浴び、暁のような赤に染まった男に皆が恐怖の感情を送る。

その視線に陸奥は一瞬だけ悲しげな表情を浮かべた後、いつもの飄々とした顔に戻り村とは逆の方向に歩き出す。

それを見た愛紗は自身の固まっていた体を動かし、陸奥に駆け寄る。

「待てどこへ行くというのだ」

もはや村に陸奥を置けぬことを悟りながら、それでも愛紗はそう陸奥に問う

陸奥は少しだけ驚いた顔をした後、いつもと同じ飄々とした顔で愛紗に答える

「さあ？風の向くままにかな：俺は疾風だから」

そう言って歩き出す陸奥いや疾風に愛紗は叫ぶように名乗る

「待て、私の私の真名は愛紗だ、この名忘れるなよ」

それに振り向きもせず片手を挙げて疾風は答える

「愛紗か、いい名だ。お前さん別嬪だしその名忘れねえよ。俺の名は疾風だ、また会おう」

素晴らしい残し疾風はその地を去る。

次に会うときはいつになるだろうか

愛紗はまた疾風には会える予感がしているのを感じていた。

六の刻 新たな出会い

疾風と愛紗達が分かれて二月ほど立った。

疾風が村を去ったのを知った鈴々や子供達は一晩中泣き腫らした物だが、大人達の大部分はほっとしていた。

あれほどの物を見せられたのだから仕方ないとはいえ、そんな大人達の態度に釈然としない物を感じながら引き止めることの出来なかった自分自身を見ると、情けない気持ちになる愛紗だった。

「疾風、あやつは今頃どうしているだろうか？」

また行き倒れてたりしないだろうか？と、どこか遠い空の下にいるであろう疾風を心配する愛紗であった。

所変わって、荊州長沙

「ぐ、ぐわー」「でやんす」「なんだな」

3人の黄布を巻いた賊らしき男が、一人の無手の男に叩きのめされていた。

「まだやる？」

男は特に凄むでもなく飄々とした感じで賊達に問いかけた。

「く、くそー覚えてやがれー!!」 「あ、待ってくださいえ、兄貴ー」
「なんだなー」

と、小悪党丸出しの捨て台詞を吐いて逃げ出そうとする3人

「あ、忘れ物だよ」

そう言ってヒョイっと男達を取り落とした武器を投げてよこす

ガン「痛てー」ギン「おぶっ」ゴン「なんだな〜」

それぞれ投げられた武器を頭に受け、痛さにのた打ち回りながらそれでもなんとか逃げ出していく賊達

すると周りから「「わあああー」」と歓声が起こった。

「お兄ちゃん」

するとそんな歓声の中から1人の少女が飛び出し男に飛びついた。

どうやらこの5歳くらいの女の子を、あの賊達が攫おうとした所をこの男が助けたようである。

「大丈夫だったか」

と男が少女の顔を覗き込むように問うと

「うん!」と元気よく答える少女だった。

「そうか璃々ちゃんはお母さんと逸れちゃったのか」

男が璃々と名乗った少女の手を引きながら問うと、璃々は心細げな顔で頷いた。

「今日はお母さんがお仕事お休みだったから、街に連れてきてもらったの。でも人がいっぱい歩いていてお母さんの手、璃々と離れちゃったの」

うぐつと涙声になる璃々

そんな璃々を男はヒョイと自分の肩に乗せた、所謂肩車というやつである。

「よしならば、早くお母さんを探さないとな」

と男が飄々とした様子で笑いかけると、安心したのか璃々は

「うん！」

と笑顔を見せた。

璃々の母を2人で捜し始めて幾許か立った頃、辺りを見廻しながら近づいてくる胸の豊かな女性を見て、璃々が歓声をあげる

「お母さん」

「璃々!!」

男から飛び降りた璃々は、母親らしき女性に飛びつくように抱きついていた。

「もう璃々あれほど逸れないように言ったのに、心配したのよ」

「ごめんなさい」お母さん

2人がお互いの無事を喜んでるの確認した男は、その場を離れようとしたが

「あの、娘が大変お世話になったようで、ありがとうございます」

と言う女性の声に引き止められていた。

「たいしたことはしてないよ」

と片手を振りその場を辞そうとした男だったが

「いえ、聞けば娘を連れてきてくださっただけでなく、娘が攫われそうになったのを助けていただいたとか、是非にお礼をさせて下さいな」

そう言って男を引き止める女性の言葉に、男は少し悩んだ後

「じゃあ、メシ食わせてくれない？腹減っちゃった」

と飄々とした感じで言った。

それを聞いた女性は、一瞬呆けた表情を浮かべた後

「ふふ、わかりましたわ我が家でご馳走させていただきますわ」

と優雅に笑った。

「お兄ちゃんお家来るの？」と無邪気に喜ぶ璃々に優しく「そうよくやったわね」と言った後

「そう言えばまだお名前を伺っていませんでしたね？私はこの長沙の太守韓玄の配下で名を黄忠 字を漢升と申します。改めて娘がお世話になりましたこと、お礼申し上げますわ」

と丁寧に尋ねると、男は少し居心地が悪そうに

「俺の名は陸奥 疾風と言う、字は事情があって無い。そう畏まれるのは苦手だから普通に接してくれ」

と飄々とした態度で言った。

それを受けて黄忠は

「ふふ、判りましたわ。でもこの話し方は地なのでお許しくださいね」

と、世の男を虜にするような妖艶な笑みを浮かべた。

こうして新たな恋姫と縁を結ぶ陸奥。

果たしてこの先どのような波乱が巻き起こるのだろうか……。

七の刻 紫苑と桔梗（前書き）

今回は短めです

七の刻 紫苑と桔梗

黄忠の屋敷にと案内された疾風は、黄忠手ずからの料理で接待されていた。

その際「娘の恩人だから」と自らの真名である『紫苑』を預けると言ってきた。

真命に対してある程度理解していた疾風は「それほどのことをしたわけじゃない」と断ったのだが

「娘の安否がそれほどの事ではないと？」と笑顔で圧され否応なく受け取らされたのである。

「パクパク ウグウグ モグモグ」

あいからわずな食欲を見せる疾風に対して紫苑は「まあまあ」と笑顔をやさず、璃々は「お兄ちゃんすごーい」と目を輝かせていた。

そんな中「おい紫苑居るのか？」

と来客があったようである。

「あら、桔梗じゃない。どうしたの今日はいきなり尋ねてくるなんて？」

返事もない内に上がりこんできた来客に親しげに声をかける紫苑、

どうやら親しい間柄らしい。

「何、久しぶりに璃々に会いたくなってな、元気だったか璃々」

と頭を撫でる女性に「うん璃々は元気だよ」とにこにこ笑顔を見せる璃々。

そんな璃々にそうかそうかと笑顔を見せた後、ふと未だに食事続ける疾風を見た。

「それで紫苑よ、さっきからこのわしを無視してメシを食らってる無礼者は何者じゃ？」

と少々不機嫌な顔で紫苑に問いただした。

「もう桔梗たらそんな言い方は失礼よ、こちらは璃々の恩人なのだから」

とそれまでの経緯を女性に説明する紫苑。

それを聞いた女性は

「ほうほう近頃の若いやつにしては、骨があるやつのようにやのゝ坊主。わしの名は厳顔、紫苑とは旧知の仲での、わしからも璃々を救ってくれたこと礼を言わせてもらおう。で、お主、名を聞かせてもらってよいかの？」

そう聞く厳顔にやっと満足した様子の疾風は

「陸奥 疾風」とだけ答えた。

「ところでお主、そうとう腕が立つと見たがどうじゃ？」

と紫苑と歓談していた巖顔が急に疾風に話を振って来た。

「あらゝ桔梗もそう思う？ 私も疾風様は只者ではないと思うわ」

と紫苑まで面白そうなことを見つけた風に食いついてきた。

疾風が「それほどでもない」と言っても

「それは謙遜じゃろゝわしの目は誤魔化せんぞ」とか「ですわねゝ私達では及びもつかない所に立っておいでとお見受けいたしますわ」とかいつて取り付く暇もないのである。

疾風の力量を看破するとは、さすが年の功といった所か「ギロツ」：すみません。

それはさておき、璃々まで「お兄ちゃんすごかったよゝ悪いお兄ちゃん達をこうエイ、ヤーって感じであつという間にやつつけちゃったのゝ」

と興奮して話すありさまである。

それを聞いてなにやら考えていた巖顔だが、急に「ふむ、決めた」と疾風に向かい

「お主に我が真名を預けよう」

と言い出した。

疾風が「何の脈絡もないだろ」

と断った所

「何を言う、お主は我が友の娘の窮地を救ってくれたではないか。それにわしはお主のことが気に入った、是が非でも受け取って貰うぞ」

と疾風の肩をバンバンと叩きながら笑って言う

「我が真名は『桔梗』紫苑共々よろしく頼むぞ」

そう言ってまた豪快に笑うのであった。

七の刻 紫苑と桔梗（後書き）

陸奥を翻弄するとは、恐るべし熟女コンビ
やはり年の功か

「「殺されたいの？」」

……すみません。もう言いません。

主人公設定（前書き）

今の所主人公以外オリキャラの出番の予定がないので、とりあえず主人公の設定を載せときます。

主人公設定

名前／陸奥 疾風…ムツ ハヤテ

性別／男

年齢／18歳

身長／153cm

体重／45kg

性格／いつも飄々としてつかみ所のない性格。

子供には好かれるし本人も子供好き。

備考／陸奥圓明流・現継承者

舞台設定／原作の「修羅の門」の設定に合わせると、『陸奥圓明流』は今から約千年前に誕生した武術となっておりますが、そうすると『真・恋姫』の世界に陸奥を持ってくるには『タイムスリップ』か『転生』もしくは『憑依』しかなくなる訳で、作者としては「転生によるチートキャラが圓明流の能力をもらう」という展開よりも「この時代にもし圓明流があつてその陸奥が恋姫の世界にきたら？」という話を書きたかったので、原作無視で「圓明流はこの時代よりもさらに何百年か前に誕生してた」という設定にさせていただきました。無理やり感バリバリですね。まあ二次小説ってことでご勘弁をw

あとこのSSで主人公以外のオリキャラ出すかやめるか迷っています。

オリキャラ出すよりも、主人公と恋姫との絡みメインでやったほうがいいのだろうか？

意見ありましたらお願いします。

ちなみに一刀は出しずらいんですね。

陸奥との絡みが想像できない…。

ので未定ってことでw

八の刻 常山の龍

疾風が紫苑達と出会ってから10日余り立っていたが、疾風は今まで長沙に留まっていた

璃々を助けた札をされた後、疾風に特に行く当てがある訳でないと知った紫苑に、暫く当家に留まる様進められそれを受けて客分のよくな形で世話になっていたのである。

まあ正確には疾風と別れることを渋った璃々に泣き付かれた為という事情もあったが、あいからわず子供には少々弱いようであった。

そんな昼下がりに特にすることもなく暇を持余していた疾風は、仕事で出ている紫苑に代わり璃々の面倒を買って出ていた。

面倒を見るといっても、璃々と共に遊び歩くといった方が正確だが

その日も璃々と仲良く街中を出歩いていたのだが、疾風にとってこの街は中々興味を引かれるようだった。この大陸に流れ着いてからという物これほど大きな街に来たのは初めてのことだった。

無論中央と比較するまでもないのだが、それでも疾風にとっては目新しい発見があり何かを見つけては璃々に嬉々として聞いて回るのだった。

そんな疾風に璃々が楽しそうに説明していく。その様はまるで仲の良い兄弟のようだった。

ただし兄と妹の立場が逆だったが

しばらく街中を散策してた2人だが、小腹が空いたと疾風が璃々を茶店にと誘った。

程なくして仲良く茶店に腰掛けた2人だったが、一瞬疾風が面白い物でも見かけたような視線を店の奥へと送った。その視線の先には3人の女性客らしき者たちがいるだけだったが

「む、」

一方視線の先では3人の女性がこの店の自慢の胡麻団子をいただいていたが、そのうちの1人白い浴衣のような物を着た武人らしき女性が無言で声を漏らしていた。

「どうしたのですか星ちゃん？」

そんな女性を不審に思ったか、隣に座った金髪で頭に奇妙なオブジェを乗せた小柄な女の子が声をかける

「いや何、一瞬強い視線のようなものを感じたのだから？」

気のせいだったかと茶を啜る女性に、先程の女の子が冷やかしかし混じりに言う

「おやおや星ちゃんも隅に置けませんね。どこぞの男性に懸想でもされましたか」

それだったら女として満更でもないのだがなと返し、胡麻団子を口に放り込む

「とすると武人としての感というやつですか？」

と2人の対極に座った眼鏡をかけた冷静そうな女性が問いかける

「ふむ、まあそうだが私の気のせいだったかも知れん、さほど気にすることもあるまい」

ともう一度茶を啜りながら星は殊更気にしてないと答える。

「さてそろそろ出るとしようか」

団子を食べ終わり茶の最後の一口を飲んでから星は2人に告げた

2人も頷き席を立とうとした時、店先でなにやら騒動が起きたようだった。

「お客様、後生ですからご無体はお止めくださりませ!？」

「うるせい引っ込んでろ爺、この俺様にこんな不味いもん食わせやがって」

「やめてお爺ちゃんに乱暴しないで」

「やかましいぞこの小娘、兄貴に逆らうのか!!」

騒ぎの方を見れば、店主らしき老人を5人もの男達が囲んで狼藉を働こうとしてるようだ

「まったく何処にでもこういう馬鹿どもがいるもんだな」

せっかくうまい茶と団子で至福の時間とすごしたというに、これでは台無しではないか

「てめえ、この落とし前はどうつけるつもりなんだ? ああん」

「兄貴、この小娘に責任をとって貰いましょうや」

下卑た笑みを浮かべ、嫌がる娘を引き寄せる男

「いやあ、放してゝお、お爺ちゃん!」

「うるせい!! 静かにしろ」

パァン

「止めてください!!? 孫娘にだけは手を出さねえでください」

嫌がる娘に手を挙げる男

「もはや黙って見ておれぬな」

怒りを露にしながら、自分の武器であろう槍を手にする星。

「星ちゃん殺しちゃ駄目ですよ」

とオブジェを乗せた女の子が事も無げに言う

相手は大の大人が5人もいるというに、止めるどころか相手の心配をする始末だ

見れば眼鏡の娘も心配など無用とばかりに見守っている。

「判っている半殺しにしとくさ」

と、にやりと口元を歪め星は一步踏み出そうとしたが、それより早く客の連れらしい小さな女の子が男達の前に立ちふさがった。

「おじちゃんたち悪いことしたら、めーだよ!!」

星は勇気ある子供だと歓心しかけたが、男の1人が腰の刀に手をあてるのを見て「まずい」と思い駆けつけようとした。

「引っ込んでろ糞餓鬼!!」

と振り下ろされた刀を止めたのは、星の槍ではなく女の子の連れらしい男の手だった。

「て、手前ゝ何しやがる放しやがれ!？」

疾風に手を掴まれた小悪党は、威勢よく反対の手で男に殴りかかったが掴まれた手を疾風が軽く捻ると体が一瞬にして宙に浮き、次の瞬間地面に叩きつけられていた。

「野郎なにしやがる!!」

疾風に仲間をやられた男たちは怒気をあらわにし、武器を抜き次々襲い掛かって行った。

だが、怒り任せに振るわれた武器が疾風に掠ることもなく、全員が軽くのされていく。

最後の1人が打ちのめされたあと、疾風は店主のところに近づき

「大丈夫かおっちゃん」

と声をかけた

「ええ、大丈夫でございます。あぶないところをお助けいただきて…
「野郎!!!」…ひい」

と店主のお礼を遮って小悪党の1人が立ち上がり再び襲い掛かってくる。

だが疾風は振り向きもせず男の武器を掴むと、男の顔を覗き込み

「金払って失せな」

とだけ短く言った。

その短い言葉に男たちは威圧されたかのように、我先にと金を置いて逃げ出していく

その金を拾って店主に渡したあと、自分の懐からも代金を払って璃々の手を引き出て行く疾風

すると1人の女性が疾風たちに近づいてきた。

「見事な腕前ですな、貴殿宜しければお名前を伺えませんか？」

疾風が振り返るとそこには、白銀に輝く槍を持ち口元に挑発的な笑みを浮かべた女性がこちらを興味深げに眺めていた。

「申し遅れましたが、某は姓を趙、名を雲、字を子龍と申す。」

とその女性は名乗った。

八の刻 常山の龍（後書き）

予告 次回は疾風VSメンマさん

…の予定だけど、予告は予定、予定は未定…

九の刻 武人の性

趙雲 子龍と名乗った女性は疾風に近づく、興味深げな表情で話しかけてきた。

「陸奥 疾風殿と申されましたか、失礼ながら先程の腕前といい貴殿は只者ではないと見ましたが、ひとつ私の願いを聞いてくれませんか？」

そういうながら、楽しそうに顔を近づけてくる。

後ろの連れの二人を見ると、また始まったかと言うような表情をしていた。

「うん何？」

そんな趙雲に疾風は事も無げに、問いかけた。

疾風と手を繋いでる璃々は遊びつかれたか少々眠そうだ。

趙雲は背筋を伸ばすと真面目な声で

「私と立ち合っていただきたい」

と持っていた槍を疾風に向けながら、そう誘いざなってきた。

「ずいぶんいきなりだな」

と疾風が苦笑していると、趙雲の連れの1人であろう頭にオブジェを乗せた少女、確か程立と言ったか、が近づいてきて

「そうですよ星ちゃん、それではなんの脈絡もなく喧嘩を売ってる
とは思えないのです」

と言ってきた。

そして疾風の方に向き直ると

「すみませんね、星ちゃんがいきなり失礼なことを言いまして」

そう言って疾風に頭を下げてくる。

「ですがお兄さん、星ちゃんがこうなったらもう誰にも止められま
せんので、犬に噛まれたとは思って諦めて付き合ってくださいま
せんか？」

「風、それでは私は躰のなっていない野良犬みたいではないか？」

「……」

「……」

「…ぐう」

「寝るな！」

いきなり眠った程立にもう1人の連れ眼鏡をかけたを女性、こちら
は戯志才と名乗ったか、が突っ込みを入れる。

「おお、あいからわず凜ちゃんの突っ込みは的確なのです。」

と、緊迫しかけた雰囲気は一瞬にして碎け散った。

「それで何で俺と戦いたいんだ？」

乾いた空気を入れ替えるごとく、改めて疾風が趙雲に問いかけた。

「それは貴殿が強いからだ。」

それに対しての趙雲の答えは至極単純なものだった。

「貴殿も武人なら判るだろう？ 己よりも強いかも知れぬ者と戦いた
いと思うのは、武人の性さがと言うもの」

そう言って、にやりと笑いながらあなたもそうでは？ と視線で問い
かけてくる趙雲

そんな趙雲の挑発とも取れる態度にも、飄々たる態度を崩さない疾風

「それでどうですか、私の願い聞き入れてはもらえませんか？
うか？」

挑発は無駄だと思ったか、一転して真面目な眼差しを向けながら疾
風に頼み込む趙雲

そんな趙雲に対して疾風は

「かまわないよ」

とあくまで飄々と軽い感じで受けた。

「いいのですか？そんなに簡単に受けてしまっただけ」

疾風が簡単に勝負を受けてしまったことに、疑問を感じたか、戯志才と名乗った少女がそう問いかけてきた。

疾風は眠ってしまった璃々を背負いながら、「いいよ」とあくまで飄々と答える。

そんな疾風を見ながら趙雲は興奮気味に

「凜よ、陸奥殿がいいと言ってるのだからかまわんではないか、では陸奥殿さっそくお手合わせ願おうか！」

と持っていた槍を構える

「ちよ、ちよっと星、あなたこんな街中でいきなり決闘を始める気ですか！？」

そんな趙雲を見て、慌てて止めに入る戯志才

「む、それもそうか」

と自身が先走ったことを恥じたか、顔を赤らめながら構えていた槍を下ろす趙雲

「それにその背負った娘さんまで巻き込むつもりですか？」

と言いながらトコトコと疾風に再び近づいた程立が

「すみませんねお兄さん、星ちゃんは今こうなると周りが見えなくなる猪さんですから、悪気はないんで許してくださいね」

と再び疾風に向かって頭を下げた

「…風よ、誰が猪だと？」

「……」

「……」

「ぐうぐう」

「だから寝るな！」

都合の悪くなった程立が再び眠ると、戯志才が再び突っ込む

そんな様子を疾風は楽しそうに見ていた。

「それでは明日改めて立ち合わせていただくと言うことでよろしいかな？」

結局今日は璃々を連れて帰らないといけない為、明日にしてほしいとの疾風の要望により明日改めてということになった。

趙雲は納得しがたい様子だったが、2人に諫められて明日と言うことで引き下がったようだった。

「では明日、日の出の頃城門前でお待ちしますぞ」

「ああ」

さすがに街中で戦うわけにも行かず、郊外という戯志才の提案で城門で待ち合わせと相成った。

「それでは御免」

と意気揚々と引き上げていく趙雲、申し訳なさそうに頭を下げる戯志才、ぼくとした表情で2人についていく程立達を見ながらどこか楽しげに笑った疾風は璃々を背負いながら帰途についたのであった。

九の刻 武人の性（後書き）

おや？戦闘シーンまでいかなかった

次回こそかならず！

十の刻 武の極み（前書き）

感想の返事遅れ気味で申し訳ありません。
なるべく早く遅れるようにします。

十の刻 武の極み

茶店での一件の翌日、疾風と趙雲、程立、戯志才の4人は、街から少々離れた場所に来ていた。ここなら邪魔が入らないからと存分に戦おうと、趙雲が早速やる気を見せる。

「ではさっそくお手合わせ願おうか」

と自らの分身である白銀の槍を疾風に向ける趙雲

対する疾風は腰にある刀に手をかけたかと思いきや、その刀を鞘ごと投げ捨てる

「…どういふつもりです、武器を捨てるとは私を舐めてますかな？」

自らの武を侮られたかと、怒りを露にする趙雲。

そんな趙雲にいつもと変わらぬ風に

「俺の流派は無手なんだ、気にせずこい」

と、飄々と答える疾風。

「…私と素手でやろうとは、後悔されるな」

そんな疾風の態度を挑発と取ったか、怒気を収めぬまま槍を持つ手に力を込める趙雲。

そして疾風がわずかに構えた瞬間、趙雲は槍をもの凄い速さで繰り

出してきた。

ビシュ

その突きの速さは、この大陸でも五指には入ろうかと言うもの

だが、なんと疾風はその槍を素手で掴み取っていた。

「！？なんと私の槍を素手で掴むとは」

趙雲が驚きの余り固まっていると

「殺す気でない攻撃など俺にかすりもしないよ。本気で来なよ、じゃないと退屈だよ趙子龍！」

ブンと槍先を放りながら、趙雲に向かって気を開放する

ゾクッ

その瞬間、趙雲はもとより少し離れた場所で見守っていた、程立と戯志才の2人まで呼吸が出来ないほどの重圧を感じる。

（な、なんだこの気は…こんな呼吸が止まりそうなほどの重圧今まで感じたことがない…こ、こんな気を人が出せるというのか！）

趙雲は背中に嫌な汗が流れるのを感じながら、それでも口元がにやけるのを止められなかった。

（私はこの男の前に立つてることが恐ろしくなる、震えが止まらず今すぐ逃げ出したくなるほどに……だがしかし同時にこの男と戦え

ることに愉悦を感じ歓喜に打ち震える自分もいる)

趙雲は恐怖と歓喜に魂が震えるのを感じながら、改めて槍を構える

「先ほどは失礼仕った、どうやら侮っていたのは私の方でしたな」

と軽く頭を下げた後、槍先に殺気を込め再び疾風と向かい合う。

「では私も慢心は捨て本気で参りますぞ!!」

そう言って疾風に向かって駆け出す趙雲

疾風が構える中、趙雲の無数の突きが襲い掛かる

「いくぞ、この趙子龍の本気の突き、見事受けてみよ、ハイ、ハイ、ハイー!!」

先程放った突きとは明らかに違い、気迫のこもった槍先が何十と疾風を襲う

だがそれでも陸奥には届かない。さすがに槍を掴むような真似は出来ないようだが、それでも全てかわしきられてしまう。

「どうした陸奥殿、あれほどの大口を叩いた割には避けるのが精一杯ですかなー!!」

自分が本気で放った何十、何百という突きをこれほどまでに見事にかわしきる陸奥に恐怖と賞賛を感じながら、あえて挑発するように口元を歪める趙雲

それに対し疾風も口元に笑みを浮かべながら

「ならいく！」

と言い放つと無数の突きが交差する中、あえて前に出る

それまで見事に趙雲が放つ槍をかわし続けていた疾風だが、前に出ることでも間合いが詰まり体を槍先が掠すめるようになる。

それでも引かず前に出る疾風、趙雲はさらに限界を超えた速度で突きを放とうとしたが、疾風の間合いに自身が入り込んだ瞬間、己の『死』を本能的に感じ瞬間後ろへと跳んだ。

ガシィィ〜！！

趙雲が跳んだ瞬間、疾風の蹴りが趙雲の顔面を襲った。瞬間的に腕を上げ防御したがそれでも体ごと浮かされた。

「ぐ、ぐむう」

（なんという蹴りの威力、あの瞬間後ろに跳べなければ死んでいたな）

趙雲は己が感じた恐怖に全身が総毛立つの感じながらも再び槍を構えようとした、とその瞬間疾風が追撃をかけるごとく趙雲の懐に入る。

「む」

趙雲が反応し構えると同時に疾風の回し蹴りが趙雲の胴に向かって

放たれた。

「くっ！」

それになんとか反応し背を向けた疾風を串刺しにしようかと槍を放とうとする趙雲

ゾクッ！？

が、その瞬間危険信号が趙雲の中に駆け抜け、またしても後ろへ跳ぶ

ぶわっ

すると疾風の体が独楽の様に回転し、趙雲の顔面めがけ先程と逆の足で後ろ回し蹴りを放ってくる

「ちい！」

その蹴りを紙一重でかわし、再び間合いをあげ槍を構えなおす趙雲

「最初の蹴りをかわしても体が空中で回転し再び蹴りが襲ってきた、あのような蹴り技があるとは……」

と趙雲が感嘆すれば

「旋^{ひまわ}を初見でかわす者がいるとは」

と疾風も賞賛の声をあげる。

再び疾風に槍先を向けながら趙雲は、このままでは勝ち目がない事

を悟っていた。

（このまま突きを数多く放っても、陸奥殿には届かんだろう…ならば残った全ての力を一撃に込め、最後の突きにすべてを賭けるのみ！！）

覚悟を決めた趙雲は、全身の力を抜きただ最高の突きを放つべく刃先に集中していく

それを感じ取ったか、疾風の気も高まっていく

両者の間に高まる緊張、もはや程立と戯志才も声を出すことすら出来ない

（思えば初めて槍を持ったあの日からの修練は、この瞬間の為にあったのやもしれぬ）

趙雲の中に今まで放った無数の突きが交差する

「ではまいるぞ陸奥殿、この突きこそ趙子龍が今放てる最高の突きだー！！！」

そう言い放つと趙雲は疾風に向かって駆け出す

「ハイー！！！」

気迫の籠った掛け声と共に、趙子龍の最高の突きが疾風を貫いた、と次の瞬間疾風の体が霞み消え去った

（残像だど！あの突きをかわしたというか！！）

驚愕と共に振り向いた趙雲の目に映ったのは、己を襲う疾風の蹴りだった

ガシィィィー！！

（ああ、届かなかったか……）

頭を蹴り抜かれながら、趙雲を襲った感情は悔しさでも悲しさでもなく、ただ遥かな高みにあるであろう武への憧れであった。

どさ…。

「「星ちゃん（殿）！？」」

疾風の蹴りを受け大地に横たわる趙雲を見て、硬直の解けた程立と戯志才が駆け寄ってくる。

「…生きてるよ」

そんな二人に無事だと声を出す趙雲

「「ほ〜〜」」

その声を聞き、安心したかその場にへたり込む二人

そんな二人の様子にくすりと声を漏らした後

「…あのような動きを人が出来るとは、武の極みとは遥かに遠いですな……。」

と誰に問うでもなく漏らした後、いつか自分もあの高さまで上り詰められるのだろうか？と、今はまだ手の届かぬ空に手を伸ばすのであった。

十の刻 武の極み（後書き）

戦闘描写って難しいですね
これが作者の限界でした。

感想などお待ちしております。

十一の刻 孫呉の姫 ? (前書き)

お待たせしました

風邪がぶり返した為、週末死んでました。

まだ好調じゃない為、今回短めですが

間余り空けたくないのととりあえず投下します。

十一の刻 孫呉の姫？

疾風と趙雲の死闘から3日ほど経った。

幸い趙雲の傷は死にいたるほどではなかったが、それでも完治まで二月ほどかかると医者に言われ、その間趙雲達は紫苑の家で世話になることになった。

最初知り合いでもない自分達が世話になることを遠慮した趙雲達だったが、紫苑曰く「あらあらお客さんが増えるのは楽しいことですわ」と言って一向にかまわないらしい。

もつとも程立と戯志才は城の雑務など手伝わされる破目になったが……。

そして趙雲達と入れ替わるように、疾風が旅に戻ると言い出した。

元々璃々を助けたのが縁でここに留まっていたが、こんなに長く世話になるつもりはなかったし、まだ諸国を旅していろいろと見聞きしてみたかった。

疾風と別れたくないと愚図る璃々を、必ずまた会いに来ると説き伏せたり、次に会うときは必ず勝ってみせると意気込む趙雲に真名である『星』を預けられたりと、いろいろありながらも新たな地へと旅立つ疾風であった。

数日後、江東のある山奥

「はあはあゝ」

1人の少女が息を切らしながら山道を走っていた。

時折後ろを振り返るように見ている所をみると、誰かに追われているのだろうか

「はあ、はあ……ちっ、陳紀のやつめ、何が『50にも満たない賊退治』だ。どう見ても300はいたぞ、いい加減な情報で賊退治など命じおって」

少女は愚痴を漏らしながらも速度を落とさず走る

「それにしても思春たちは大丈夫だろうか…」

ふと少女は残してきた部下達の心配をする。

少女達は自分達が客将として仕えている（実際は人質同然に扱われていたが）主君の部下から、盗賊退治を命令され自身の部下を率いて出陣したのだが、事前に聞かされていた情報より賊の数が数倍もいた為、逆に全滅の危機に陥り敗走する羽目になったのである。

その際に部下達が賊を引きつけ少女を逃がしてくれたのだが、その中には一番頼りになる自身の側近たる人物もいたのだ。

「くっ情けない、袁術の部下ごときの情報を鵜呑みにして出陣するとは」

（こんなとき姉さまならどうしてただろう、きっと斥候を出すなりして情報の有無を確かめただろう）

今更悔やんでも後の祭りとなりながらも、少女は自身の未熟さを痛烈に感じていた。

（とにかく今は逃げ切らねば、こんな所で死んでしまったら姉さま達にも思春達にも申し訳が立たないわ）

そう思い少女は更に足を速めるのだった。

数刻後、日も暮れ始めたころ少女は川原に辿り着いていた。

賊からはだいぶ離れたこともあり、緊張が解けたせいか強烈な喉の渴きを覚えた少女は、水を求め川へと近づいていった。

すると人のいる気配を感じ物陰に隠れて様子を見たが、そこで少女は奇妙な光景を見ることがとなった。

（な、何をしてるのだ？ あれは……）

そこには上半身裸で下帯を着けただけの男が、川に入り下半身を水に沈めじつと川を見つめているのである。

（何だ、もう冬になろうかというこの時期に、寒くはないのだろうか？）

少女は自身が追われている立場も一瞬忘れ、その奇妙な光景に目を奪われていた。

どれくらいそうしていただろうか、少女がふと喉の渴きを思い出し川へ近づこうとしたその時、男が目にも止まらぬ速さで川の水を蹴り上げたのである。

すると銀に輝くものが天に弾け飛び地面に落ちた。

少女が何かと目を凝らしてみると、それは魚だった。

（何だと！あの男は魚を蹴り上げたというのか？）

少女がありえぬ光景に目を疑っている間に、男が次々魚を蹴り上げていく

10匹ほどの魚が地面に落ちたとき、もう充分なのか男が水から上がってきた。

そしてあらかじめ用意してあったであろう焚き火の周りに、棒切れに刺した魚を立てていく

全ての用意が終わったのか、側にあった服を着込んだ男が少女の方を見てこう言って来た。

「なあ、飯食うか？」

奇妙なことになった

少女はそう思った。賊から敗走してる途中だというのに、なぜ私は見知らぬ男に食事を施されているのだろうか……

だがすでに日も暮れたししかも無我夢中で逃げ続けた為に、自身の現在位置も掴めぬ現状では、夜道に行くのは危険すぎる。

それに逃げ惑ってるうちは忘れていたが、こうして一息入れてしまうと空腹を思い出してしまう。

結局少女は男の申し入れを受けることにした。

焼かれただけの魚だったが、空腹のせいかもしれないより美味しい食事に感じた。

それにこうして釣れたての魚を焼いて食していると、幼い頃自分の姉とその親友に連れられ魚釣りをした記憶が蘇る。

（ふふ、姉さまったら自分が率先して釣りを始めるくせに、いつも最初に飽きて結局私達に釣りを押し付け自分は山とかに遊びに行ってしまうのよね）

懐かしい記憶と共に腹が満たされたせいか、急に体が疲労を訴え強烈な睡魔が襲ってきた。

（いけないこんな時にしかもこんな場所で見知らぬ男の側で眠ってしまうなんて……）

頭を振るい眠気を追い出そうとするが、1日中走り回った疲れと追

い回されたからであろう精神的な負担でもはや限界であった。

（駄目、こんな所で眠ってる、場合じゃ、ないのに…思春たちも、たす…にいかな、きゃ）

睡魔との激闘を演じた少女だったが、本能からくる欲求になすすべなどなく、いつしか眠りについてしまった。

十一の刻 孫呉の姫 ? (後書き)

そんな訳で、呉編突入です。

呉のヒロインは孫策にするか孫権にするか悩みましたがあえて武人ではない（と作者は思ってる）孫権にしました。

次回は「陷陣営」の話の次に投下予定なので少々開きますが、週末までには呉編終わるといいな…。

感想などお待ちしております、ではまた次回！

十二の刻 孫呉の姫 ？（前書き）

遅くなりましたが、ようやく投稿です

十二の刻 孫呉の姫？

ちゅん、ちゅちゅん…

「う、ううゝん」

翌朝、鳥の囀りと共に少女は目をさました。

「ここはどこだっけ？確か私は昨日…」

少女は寝惚けた頭で自身の状況を思い出そうと、頭を数度横に振った。

「そうだ確か私は賊から逃げてきてそれで…：はっそうだ思春達はどうなったのだ、こうしてはおれぬ早く援軍を呼びに行かなければ…：て、ええええ！？」

少女は昨日賊から敗走した時、部下が盾となり逃がしてくれたことを思い出し助けを呼びに行こうと身を起こそうとして、その時初めて自分の今の状況を知った。

「な、なんで私お、男の人とだだだ、抱き合って、え？え？え？こ、これっていったい」

そう少女は昨夜知り合った男と抱き合うように眠っていたのだった。

「ふ、ふわゝあ、お、起きたのか」

そこへ少女の混乱した声に起こされたか、暢気な男の声がした。

「っつ」

少女はその声を聞いた途端、緊張が頂点に達し顔を赤らめ俯いてしまった。

「さて腹減ったな朝飯でも、うん？どうしたんだお前」

そんな少女に気づいたか不思議そうに少女の顔を覗き込む男に対して

「きゃあアアあああああゝゝゝゝゝゝ！！」

少女にできたことは大声で悲鳴をあげることと

パアアンーーーー！！

男の横面を思いっきり叩くことだけだった。

一方その頃少女の腹心たる部下である、思春、達は、部下に多大な犠牲を出しながらも賊達をうまく分断し各個撃破することにより、なんとか賊の殲滅に成功していた。

「生き残った部下はこれだけか？」

少女に思春と呼ばれている武将らしき女性が、誰に問うでもなく呟いていた。

賊退治にと80の部下を率いて出陣したが、敵の数が情報の数倍もいたことで部下達が混乱し、生き残ったのは思春も含めて10にも満たないありさまであった。

（く、本来であれば私が蓮華様にご忠告申し上げて、斥候を出すなりして賊の正確な数を把握すべきだったのに）

主たる少女の初陣ということもあり、自身もどこか冷静でなかったことを後悔したが最早あとの祭りであると意識を切り替えた。

（今はそんなことよりも早く蓮華様をお探ししなければ）

思春は一刻も早く主たる少女を探すべく、疲れきった部下たちを叱咤し少女が逃げたであろう麓に向かって山を駆け下りるのであった。

「え、えーとその…ごめんなさい！」

その頃興奮状態から落ち着き冷静になった少女は、男から事情を聞き平謝りしていた。

「私が凍えぬよう火の番をしてくれたばかりか、体で暖めてくれていたなんて」

冷静に考えれば今はもう初冬である。たとえ焚き火をしていたとはいえ、あのままでは風邪くらい引いてたかも知れない。

「その、起きたらいきなり貴方の顔が側にあったせいで混乱しちゃって……。」

と少女は起きたばかりの時とは別人のように、シュンとしおらしくなっていました。

勘違いとはいえ、昨日食事をもらったりした恩人に対して平手を放ってしまったことに自己嫌悪してるようだった。

「ああ、もう気にしなくていいよ。状況からすればお前さんの反応も当たり前だし、俺は気にしてないよ」

対して男の反応は、本当に気にしてないかのように飄々としたものだった。

「それより腹減ってるだろう？まずは飯にしよう」

そう言って男が見せた笑顔に少女は不覚にも胸を高鳴らせてしまった。

（なんだ、この男の屈託のない笑顔を見ると胸が締め付けられるようだ。この気持ちはいったい何なのだ？）

少女は今まで感じたことのない感覚に戸惑いながらも、表面上は冷静に対応しようと勤めた。

「いや申し出は有難いが私は一刻も早く城に帰らねば、詳しい事情は省くがそうしなければ部下達が危ないのだ」

そう言って立ち上がろうとする少女だったが「いたっ」と苦痛を訴

え再びしゃがみ込んでしまった。

「そうは言ってもその足では麓まで歩けないだろう？」

そう言う男の言葉に少女は痛みの走る自らの足を見る。

昨日は必死だったので気がつかなかったが、慣れぬ山道での逃避行で足を酷く痛めてしまっただけ歩くことはおろか立ち上がることもすらままならなかったのである。

「大丈夫だこれくらい、一刻も早く私が行かないと思春達が高いのだ」

といい再び立ち上がろうとするが、またもや激痛に顔をしかめてしまう。

「ふう、しかたがないな」

そんな少女を見ていた男はそう言うと、少女の前に背を向けしゃがみ込んだ。

「なんだ？」

「袖摺り合うのも多少の縁だ、麓まで連れてってやるよ」

「い、いやしかしそこまで甘えるわけには」

少女は自分を背負うとする男に対し、さすがにこれ以上迷惑はかけられんと断りを入れたのだが

「遠慮してる場合じゃないのだろう？ 仲間が心配なら早くしたほうがいい」

と言う男の言葉に押され、顔を赤らめながら遠慮がちに男の背におぶさった。

「す、すまない」

そう誤りながらまだお互いの名前もまだ知らないことに少女は気がついた

「そう言えばまだ名乗ってもしなかったな、私の名は孫権 字は仲謀。良ければ貴方の名も聞かせてはくれぬか？」

「俺は、陸奥 疾風」

「…陸奥 疾風」

そう疾風が名乗った名前を、大切そうに呟く孫権だった。

「それじゃ行くぞ、少々揺れるが足が痛かったら言ってくれよ」

「え、ええわかったわ」

孫権はそう返事しながらも疾風の背に身を預けながら、自らの内から湧き上がる不思議な感情に戸惑っていた。

（何なのこの気持ち？ 男の人に背負われるなんて初めてだけど、何か胸の内が温かくなるような気持ちになるわ。それでいて鼓動が激しくなるようなこの感覚…これは何なのかしら？）

チリン♪

と孫権が自身から発した淡い気持ちに戸惑っていた所に、鈴の音と共に聞きなれた人の怒声が聞こえた。

「貴様、蓮華様に何をしているすぐに離れろ!!」

「思春!?!」

十二の刻 孫呉の姫 ? (後書き)

感想お待ちしております。

蓮華がヒロインになるかは未定ですよ
とりあえず全ヒロインと顔合わせさせたいです。

袁家の二人は別にいらんかw

十三の刻 孫呉の姫 ? (前書き)

お待たせしました

十三の刻 孫呉の姫？

鈴の音と共に現れた女性は殺気を隠そうともせず、鋭い視線を疾風に向けてきた。

「貴様、何者かは知らんが即刻その方から離れろ。素直に言うことを聞けば命だけは見逃してやる、だが従わんと言うなら！」

そう言うときとスラッと腰の短刀を引き抜き構えると、いつでも飛びかかるような姿勢をとる。

それに対して疾風はいつもと変わらず、飄々とした態度で女性を見ていた。

「貴様」

その態度が気に触ったのか、いよいよ疾風に飛びかかるようになった女性に対し、一瞬呆然と事の成り行きを見ていた孫権が慌てて声をかける。

「ま、まって思春彼は敵ではないわ、私の恩人よ！」

「…恩人ですか？」

その言葉を聞きとりあえず聞く姿勢になった思春と呼ばれた女性に対し、孫権はこれまでの事情を急ぎ説明する。

「…という訳なの、わかってくれたかしら？」

「なるほど」 応は納得しました」

孫権の説明を聞いた思春はとりあえずは納得したのか、短刀を収めた。もっとも疾風に対する警戒は怠っていないが。

「それはそうと蓮華様、いつまでその者の背におぶさっているおつもりですか？」

「…
^
?」

思春に言われて初めて孫権は、今だ疾風の背にいることを思い出した。

「え、え、え、ええええええええええ！ちよ、ちよつとなんでもっと早く言ってくれないのよ」降ろして、すぐに降ろしなさいよ」

そして顔を真っ赤にして疾風の背で暴れだしてしまうのだった。

「…そう、賊は殲滅出来たけどこちらも多く犠牲を出してしまったのね」

孫権が落ち着くの見計らつて、疾風との自己紹介を終えた思春こ
と甘寧は、賊討伐の顛末を孫権に話していた。

「は、出陣した80名の内70名は討ち死にしようです、申し訳

「ごいません。」

「ううん、思春たちが悪いわけじゃないわ、今回のことは私の失策よ」

頭を下げ謝罪する甘寧に対し、首を振りながら否定する孫権

「このことを姉さまが聞いたら、さぞ呆れる事でしょうね…」

と溜息混じりに呟いたが、頭を2、3度振り思考を切り替えるところからのことを話し出した。

「とにかく兵たちには申し訳ないけど、遺体を引き取るにしてもこのままでは無理だわ。1度街に帰ってから手配するしかないわね」

そう言いながらようやく甘寧に追いついてきた生き残りの兵たちを見る。皆、傷を負っていないものはいないし、そもそも10名では70名もの遺体を運ぶのは無理だった。

「とにかく街に帰りましょう、皆丸一日働き詰めで疲れてるでしょう。それに傷の手当もしないと、痛っ！」

そう言って自身の怪我也忘れて立ち上がった孫権が、足への激痛で思わず声を上げる

「蓮華様無理をなさってはいけません。私が背負いますのでどうぞ背中へ」

そう言って孫権に背を向けしゃがむ甘寧だったが、孫権は首を振り遠慮した。

「思春貴方全身傷だらけじゃない、貴方だけではない皆私のせいで負傷してるわ。これ以上私が貴方達に負担をかけることはさすがに出来ないわ」

「家臣が主の為尽くすのは当然のことです。気になさることはありません」

そう言って促すが、孫権は頑なにそれを拒んだ。

このままでは埒が明かないと甘寧が強引にでも背負おうと考えたが、その前に疾風が孫権を抱きかかえた。

「え。ちょちょつと何するのよ！？お、降ろしてちょうだい」

「貴様！蓮華様に何をする！？即刻放さねば首を落とすぞ」

と、疾風の腕の中でジタバタ暴れる孫権と、刀に手をやろうとする甘寧を制して

「暴れるなよ、あんたは1人で街まで歩けないし、部下は怪我をしてるから迷惑をかけたくない。だったら俺が運ぶのが1番だろ？」

と屈託のない笑顔で言った。

その笑顔を見た途端、孫権は真っ赤になり大人しくなってしまう。

「で、でもなんの関係もない貴方にこれ以上迷惑は…」

と消え入りそうな声で呟く孫権に対し、それこそ今更だたと孫権を

抱えたまま歩き出す疾風だが、

「ちょ、ちよつとまで！」

その時完全に蚊帳の外に置かれていた甘寧が、疾風たちの前に回りこんで立ちふさがった。

「何を当たり前のように歩き出している。私は貴様なんぞに蓮華様を任せた覚えはないぞ！」

と詰め寄りながら大声で怒鳴る甘寧を、不思議そうに見つめながら疾風は言う

「？何を怒っているか知らんが、こいつは歩けないしあんた達には負担をかけたくない。ならば俺が運ぶのが1番早くないか？」

「つわ、私はこの程度の怪我などなんともない！貴様の様な得体の知れぬやからに大切な主君を任せるわけには…」

とさらに食い下がるが

「あんたの矜持かなにか知らんが、そんなことよりこいつの治療の方が大切じゃないのか？」

と再び麓に向かって歩き出す疾風に言われ、渋々ながら甘寧はその後を追った。

――以下道中での会話――

「ね、ねえ？ 私重くないかしら？」

「うん？別にそんなことないよ」

「そ、そうそれならいいのだけど……あ、あの」

「うん？」

「わ、私汗臭くないかしら？き、昨日とか一日中走り回ってたし…」

「？何を気にしてるんだか知らんが、あんたからは良い匂いがするな」

「え、え、え！？」

「うん、なんだか判らんけど良い匂いだ」

「え、えっとあ、ありがと…」

「？」

「あ、あの昨日から貴方にはお世話になりっぱなしね」

「気にするな、大した事じゃない」

「そんなことはないわ。ねえ、何で私を助けてくれたりしたの？」

「俺の家にはこんな家訓がある「困ってる人がいれば助ける。そう

すれば飯が食える」って」

「…そうなの。うん？でもご飯を貰ったのは私よ？」

「そういえばそうだな」

「ふふ、おかしな人ね」

「そうか？」

「そうよ、ふふふ…」

「…街に着いたら、やはりやつは殺そう……」

十三の刻 孫呉の姫 ? (後書き)

タラタ〜ン♪

蓮華フラグが立ちました

思春との決闘フラグが立ちました

そしてこれでもヒロインとは限らないと言い張る作者だった

感想などお待ちしております

十四の刻 鈴の音の武人（前書き）

セリフ以外の名前については、疾風の基準で書いてます。

疾風が真名を許されたら真名で書きます。

ちなみに自分の作品では真名が許されるまで時間がかかります。

まあ、一部例外もありますが（鈴々とか能天気な娘とか、桔梗とか豪快というか深く考えてない人とか）真名とはそれほど大事な物と捕らえてるんですが、しかしいつまでも孫権とか書いててもあれな
んで、もっとさっさと預けちゃったほうがいいですかね？

十四の刻 鈴の音の武人

疾風が孫権達と九江の街に戻ったその日のうちに、傷の手当を終えた孫権は甘寧を伴って自分達の名目上の上司である九江太守の陳紀に賊討伐の結果を報告しに城へと赴いていた。

元々孫権の母である孫堅は江東一帯を収めていたが、彼女が戦で討ち死にした後その領土は袁術によって掠め取られまだ幼かった孫堅の娘達は、保護の名の下袁術の監視下に置かれることになったのである。そして現在は食客との建前はあるものの、各地に分散させられ配下として無理難題を押し付けられてるのである。

さて一方の疾風と言えば、孫権を街まで送り届けたその後そのままお暇するつもりだったのだが、孫権が是非にお礼をと言うのと、甘寧が本人も嫌そうにしながらも「蓮華様のご好意を無にするつもりなのか！」と喉元に短刀を押し付けてくるので（むろん孫権には見えないように）しばらく逗留し食事などをご馳走してもらうことにした。

そして孫権達の帰宅後早速ご馳走が振舞われた訳だが、遠慮なしにそれらを平らげあまつさえお代わりを要求する疾風を見て孫権は「よほどお腹が空いてたのね」とクスクスと笑みを零し、甘寧は「無遠慮な…」と蔑む様にずっと睨みつけていた。

翌朝、孫権達と朝食を終えた後暇を持余した疾風は街でも見て歩こうかと出かけようとしたが、庭先で傷も癒えてないだろうに修練をおこなう甘寧を見かけそのまま見物を始めた。

それから一刻ほどたったろうか。

甘寧は昨日の疲れなど感じさせない動きで一通りの修練を終えたあと、先程からこちらを見続けている疾風にイラついた声で話しかけてきた。

「…それでさきほどから貴様は何をしているのだ」

「うん？、お前さんの稽古を見物してた」

と疾風はいつも通り飄々とした感じで、見たままの事を言ってきた。

「貴様馬鹿にしているのか」

その態度にさらにイラついた甘寧は、静かながら怒気を含めた声で疾風を睨む。

「別に馬鹿にしたつもりなんかないんだがな」

対する疾風はそんな甘寧の殺気を孕んだ声にも、飄々とした態度を崩すことをなかった。

「…貴様」

そんな態度に我慢が効かなくなったか、一度は収めた腰にある短刀に手をやりながらさらに細めた目で疾風を睨みつけた。

「蓮華様が何と言おうが、私は貴様を信用などしておらぬ。それ以上愚弄するなら斬って捨てるぞ」

といつでも飛びかかれるような姿勢を取る甘寧。

そんな甘寧に疾風は口元に笑みを浮かべながら

「お前さんも短気だな…が、よしの方がいい…そんな怪我でしかもその程度で頭に血が上るようじゃあ俺には勝てないよ」

「…面白い勝てぬかどうか試してやろう…抜け」

そう言って腰の剣に手を当てたまま構える甘寧、それに対し疾風は仕方ないなといった風に

「俺の流儀は無手なんだ…このままでいい…」

と懐に入れていた手を抜き構えを取る

スッ

ジリ

間合いが詰り緊張が高まる

（無手と言うことは組み打ち術か、だが無手で私の剣速を捕らえられると思うな！）

さらにもう一步間合いが詰まった瞬間

「はあああ！」

との気合と共に居合いで疾風の首筋を本気で斬り付ける甘寧

ジャツ

くんっ

目にも止まらぬ速さで放たれた甘寧の居合いだが、疾風は難なくかわす。

「…次は外さんぞ」

再び腰の鞘に剣を戻し、低い体勢で居合いの構えを取る甘寧

それに対して笑みを浮かべたまま構える疾風

再び空気が重くなりかけたその時

「…貴方達、何をやっているの？」

と孫権の声が聞こえた。

「…もう何をやっているのよ貴方達は」

事情を聞いた孫権は溜息混じりにそう言った。

「思春、昨日も言ったけど疾風は私の恩人よ、余り無下に扱わないでね」

主にそうお願いされた甘寧は不承不承ながら頷くしかなかった。

「疾風もそんなに暇ならこれから私の相手をしてもらえないかしら？ 丁度政務の合間にお茶にしようと思っていたのよ。付き合ってくれるなら有難いわ、もちろん美味しいお菓子も出るわよ？」

美味しいお茶菓子と言われれば疾風が行かない訳がない。さすがと言うか、この短い付き合いで疾風の扱いを心得てる孫権だった。

「では先に食堂に行っていてね、私もすぐに行くわ」

言われたとおりに向かう疾風を一瞥したあと、孫権は疾風の背に鋭い視線を送る甘寧に話しかけた。

「ねえ思春、疾風ともう少し仲良くはなれないかしら？」

主にそう言われ疾風から視線を外した後、甘寧は

「…無理です」

ときっぱり断った。

「はあくまあ仕方ないけど、でも喧嘩を仕掛けるとかはやめてね？ 幾ら貴方が本気じゃないとしても万が一怪我でもされたら困るわ」

「…本気でしたよ」

「え？」

主の忠告を一言で否定してきた忠臣の言葉を、孫権はすぐには理解できなかった。

「先程の勝負私は本気で斬りつけました。それでいてあやつに軽くあしらわれたのです。」

孫権は甘寧の言ってることが、本音だと信じられなかった。

（そんな、思春は我が孫呉の武将の中でも最強の部類に入るわ。彼女と互角に戦えるのは姉様を除けば祭くらいのはず。でも、思春がこんなことで私に嘘を言うとは思えないし…）

「…さらにあやつは手加減をしました。私の居合いの合間に蹴りを放ってきていたのです。」

そう言い甘寧は己の鞘を孫権に見せた。

「こ、これは鞘に亀裂が…」

「ええ、あやつが放なった蹴りが入っていました。本気ならば死んでいたでしょう…。」

そう言いながら悔しげに唇を噛む甘寧

「確かに私は慢心していたようです。あやつの実力を見抜けていなかったのですから…。」

そう言いながら疾風が去った方を一瞥する

「しかし、次にやるときは勝って見せます」

そう言い放つ甘寧の顔に少しだけ楽しそうな笑みが浮かんでいるのを、複雑な表情で見る孫権であった。

十五の刻 夢（前書き）

明けましておめでとうございます。

遅くなりましたが今年初投稿です。

今年はもう少し執筆時間が取れるようにがんばります。

十五の刻 夢

疾風が孫権の元に身を寄せてから10日ばかり立ったある日、突然疾風が旅に戻ると言い出した。

「…何故だ？何故いきなり出て行くのだ」

その話を疾風から聞かされた孫権は、思わず疾風に詰め寄っていた。確かに元々は助けてもらった礼をする為に、疾風には逗留してもらっていたのだが、疾風と過ごす日々がとても心地よい物に感じていた孫権は、いきなり出て行くと言った疾風の言葉に動揺を隠せずにいたのだった。

「は、疾風はこの暮らしが気に入らなかったのか？」

今にも泣き出しそうな表情で上目遣いに見上げてくる孫権に対し、疾風は少し困ったような表情を浮かべた。

「そんなことはないよ、ここの飯は美味しいし居心地も良かった。何よりあんたと共にいると楽しかったしな」

そう言いながら疾風にしては珍しく照れたのか、右の頬をかき苦笑を浮かべた。

「なら何故？」

孫権は疾風の言葉に嬉しさを感じながらも、それでも出て行くと言う疾風に対し納得がいかずさらに問いかける。

「なあ孫権、お前には絶対に叶えたい夢ってあるか？」

「…え？」

いきなり関係ない問いが返ってきたので一瞬意味が掴めなかったが、さっきの問いに関する答えに繋がるのだろうと思った孫権は、周りに袁術の手の者がいないことを確認してから答えた。

「そうね、私の夢は 母^{かあ}さまが治めていた江東の地を取り戻し、家族や仲間や民達と幸せに暮らすことかしら」

そこには 貴方^{疾風}もと思いながら、さすがに恥ずかしくて告げられなかった。

「そうかお前さんなら叶えられるだろう」

そう嬉しそうに言う疾風を見て、きっと疾風は自分が叶えたい夢の為にまた旅に出るのだろうと理解した孫権は、少し溜息混じりに疾風に聞いてみた。

「貴方の叶えたい夢って？」

すると疾風は少し遠くを見ながら

「この大陸ってやつは俺が住んでいた国より遙かに広い、世界ってやつはさらにとてつもなく広いだろう。強いやつらがいくらでもいる…だろうさ。俺はそいつらと戦ってみたい…戦って『陸奥園明流』が、『地上最強』であることを証明したい。それが俺の…いや陸奥の夢…かな」

「世界…か」

この大陸どころか世界中の猛者と戦ってみたいなど、他人が言ったならば笑い話にすらならないだろう。だが目の前にいる男が言ったのならば、もしかしてと思わせる何かがあると孫権は思った。

同時にこの男を一つの所に押し込めて置けないだろうと言う事も…。

「そうか、世界か…それは大きな夢だな。だがお前なら叶えられそうだ。」

孫権は遠くを見つめ続ける疾風を眩しそうに見ながら、流れそうな涙を拭き微笑みかけるのだった。

その夜、疾風と孫権それに甘寧の三人は疾風の送別の為ということ、小さな宴を開いていた。

甘寧も疾風に対して心を開いたと言い難いが、最初の頃ほど険悪なものとはなくなっていた。

「疾風、貴方の旅の無事を祈ってるわ、元気でね」

「ありがとう、あんた達には世話になったな」

「……」

まあ、決して仲良くはなっていないが。

「ううん、最初にお世話になったのは私の方よ。それに貴方が来てくれて…楽しかったわ」

「そうだな、俺も楽しかったよ」

「本当ならいつまでもここにいてほしかったけど…」

「…すまん」

「い、いえそんなこと…そ、そうだわ疾風、貴方に是非受け取って貰いたい物があるの」

場の空気を入換えるためか、明るく振舞いながら孫権がそう言い出した。

そして、コホンと一つ咳払いをした後、真面目な顔をし疾風を真正面から見つめながらこう告げた。

「陸奥 疾風 貴方に我が真名を預けたい是非受け取ってほしい」

そう孫権が告げた瞬間、甘寧が一瞬険しい表情を浮かべたが、特に反対はしなかった。

「我が真名は『蓮華』この名受け取ってほしい」

そう告げた蓮華に対し疾風は珍しく真面目な顔で

「確かに受け取ったよ『蓮華』、この名大切に預からせてもらう」
そう言った。

「…おい」

するとそれまで一言も発しなかった甘寧が疾風にぼそつと話しかけてきた。

「うん、なんだ甘寧？」

「思春だ」

「？」

「私の真名だ、貴様に預けてやる」

とぶつきらぼうながらも、疾風に真名を預けると言ってきた。

「いいのか？」

「かまわん、我が主が認め真名を預けたのだ。それに私より強い男としてお前のことは認めている。」

「そうか判ったよ『思春』、よろしくな」

そう言いながら差し出した疾風の手を

「…ああ」

そう言いながら握り返す思春だった。

翌日、二人に見送られながら旅立つ疾風の姿があった。

「それで疾風、貴方これから行き先とかは決めてあるの？」

そう言う蓮華に疾風はいつもの飄々とした顔で

「うん、とりあえず都を目指そうかと思っている」

と答えた。

「…都か、確かあそこには今『董卓』が駐屯してるはず。あそこの軍にはこの大陸最強を謳われる『呂奉先』や神速と言われた『張文遠』がいるはずだ」

そう思春が漏らした呟きを聞き、不敵な笑みを零す疾風。

それを見た思春は鋭い眼光を疾風に飛ばしながら

「…いいか私は次に会うときまでに強くなっておく、そして今度こそ貴様を叩き潰してやる。だからそれまで誰にも負けるなよ」

そう言い放った。

「陸奥園明流の歴史に敗北の二字はないよ」

そう言い二人に背を向け歩き出す疾風。

目指すはこの国の中心『洛陽』。

そこにはこの大陸最強を誇る武将が待っている。

修羅対人外

人を超えた化物^{けもの}同士の戦いは近い……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5382y/>

恋姫外伝～修羅と恋姫たち

2012年1月11日10時50分発行